

山口県埋蔵文化財調査報告第122集

下岡田遺跡

—豊浦郡豊浦町—

1989

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

近年、農業基盤整備の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財へも少なからず影響を及ぼしているところ です。

私達の県土山口を築いてきた先人達のその永い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団では教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係ります埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

ここに報告しました豊浦郡豊浦町所在の下岡田遺跡の調査では、奈良時代を中心とする集落関係遺構が発掘され、数多くの土器や県下でも珍しい土馬が発見されました。これらの資料は、当時の人々の生活や文化を知る上で、貴重な手がかりを与えてくれました。

発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

終わりに、調査に当たりまして、御指導・御協力をいただいた関係各位に対し、深甚なる謝意を表わすものであります。

平成元年2月

財団法人山口県教育財団 理事長 高山 治

序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して、山口県教育委員会では、関係機関との協議を行い、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和63年度は、豊浦郡豊浦町に所在する下岡田遺跡の発掘調査を実施し、奈良時代を中心とする集落関係遺構を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知る上で、数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査結果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として広く活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成元年2月

山口県教育委員会 教育長 高山 治

例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業に先立ち、山口県農林部の委託を受けて財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が昭和63年度に実施した豊浦郡豊浦町所在の下岡田遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査の実施にあたり、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、豊浦町役場、豊浦町教育委員会の協力を得た。また地元の方々には、直接発掘調査に参加していただき、大変お世話になった。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団（理事長 高山 治）
	山口県教育委員会（教育長 高山 治）
事務局	財団法人山口県教育財団（事務局長 田中義人）
	山口県教育委員会文化課（課長 工藤公照）
	同（係長 藤井勝彦）
調査担当	山口県埋蔵文化財センター 次長 中村 徹也
	財団法人山口県教育財団事務局 指導主事 阿字雄 徹
	同 同 藤本 憲司
〔援助〕	山口県埋蔵文化財センター職員

4. 出土磁器の鑑定については、山口県立美術館学芸課主任榎本 徹氏の指導・助言を受けた。
5. 本書にある掲載した地図は、国土地理院発行25,000分の1地形図「川棚」を複製使用したものである。
6. 本書に使用した方位は国土座標（第3座標系）で標示したが、磁北のものについては但し書きを添えた。
7. 本書に使用した遺構略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土壌
8. 本書の作成・執筆は、藤本（Ⅰ、Ⅱ）・阿字雄（Ⅲ、Ⅳ）・中村（Ⅴ）が分担し、阿字雄が編集した。

目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯	2
III	遺構	4
	1) 掘立柱建物	4
	2) 溝および溝状遺構	9
	3) 土 壙	13
IV	遺物	15
	1) 土 器	15
	2) 瓦・土製品	18
	3) 土 馬	20
V	まとめ	20

図版目次

- 図版第1 調査区全景
図版第2 I・II・III地区全景
図版第3 IV・V地区全景 SD-3
図版第4 SD-2・3 土馬出土状況
図版第5 SK-1・2・5・6・7
図版第6 土師器 (SK-2・5)
図版第7 土師器・須恵器・磁器 (SK-1・2・5・6・13 柱穴)
図版第8 土師器・須恵器・鍋 (SK-7 SD-1・2 柱穴)
図版第9 土師器・須恵器 (III・V地区包含層)
図版第10 鉄滓・土錘・土製紡錘車・土製模造鏡・土馬・瓦
(SD-2・3 III地区包含層 IV地区表採)

挿図目次

- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 1
第2図 上岡田遺跡遺構…………… 2
第3図 上岡田遺跡遺構実測図…………… 3
第4図 調査区設定図…………… 3
第5図 II地区遺構配置図…………… 4
第6図 I・III地区遺構配置図…………… 5・6
第7図 IV・V地区遺構配置図…………… 7
第8図 掘立柱建物実測図…………… 8
第9図 SD-1 実測図…………… 9
第10図 SD-2 実測図…………… 10
第11図 SD-3 実測図…………… 11・12
第12図 土壌実測図…………… 14
第13図 出土遺物実測図(1)…………… 16
第14図 出土遺物実測図(2)…………… 17
第15図 出土遺物実測図(3)…………… 19

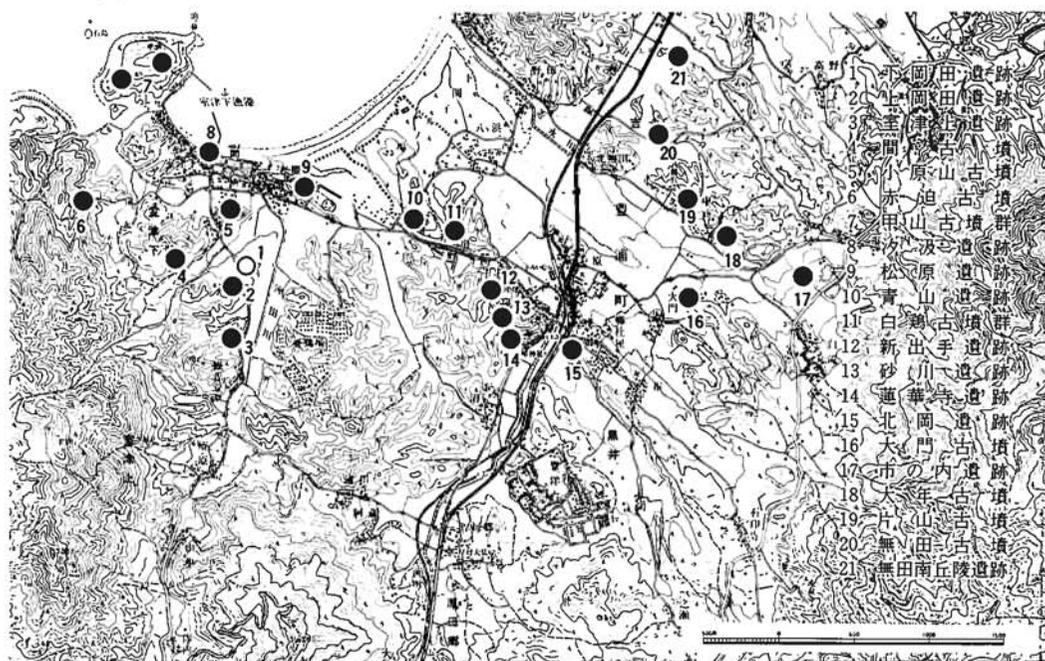
* 土壌一覧表…………… 13

I 遺跡の位置と環境

下岡田遺跡は、山口県の西端中央部に位置する豊浦郡豊浦町大字室津上に所在する。本遺跡は、室津湾の南にのびる旧海岸線、八ヶ浜の砂丘を見降ろす。眼下には北流して湾にそそぐ沖田川があり、その左岸にあたる小沖積台地上に立地する。

豊浦町においては、川棚川下流に発達した沖積平野をはじめとして、いくつかの沖積地がある。いずれも小規模なものでありながらも、響灘沿岸地域ではいちばんまとまった広さを有する。この沖積地上に、旧石器時代から古代・中世にかけての遺跡が数多く存在する。尖頭器・握斧・掘槌などが出土した磯上遺跡や、豊北町の土井ヶ浜遺跡と並ぶ弥生時代の埋葬跡である中ノ浜遺跡は、全国的にも著名な遺跡である。本遺跡のある沖田川周辺流域は、八ヶ浜砂丘上や室津湾に面した山塊・砂丘の後背地を挟んだ丘陵とともに、古代から中世に至る遺跡密集地である。八ヶ浜の南端には、古墳時代前期から後期、および中世の、主として埋葬に係わる汐汲遺跡がある。さらに、室津湾頭の西方にそびえる甲山の東および東南の山麓には90余基の横穴式石室をもつ甲山古墳群が知られている。収集遺物から6世紀後半から7世紀前半と推定される。また本遺跡の北側丘陵の頂部には、9基が並ぶ小原山古墳がある。この古墳は箱式石棺を内部主体とする古墳時代前期の円墳である。また西側の丘陵には、10基ばかりの横穴式石室をもつ古墳が点在しており、間（はざま）古墳群として総称されている。

本遺跡周辺の古墳群をみると、その古墳に埋葬されている人々の集落の地を考えずにはいられない。どの古墳も、下岡田遺跡の性格を考える上で、見逃すことのできない遺跡であるといえよう。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ 調査の経緯

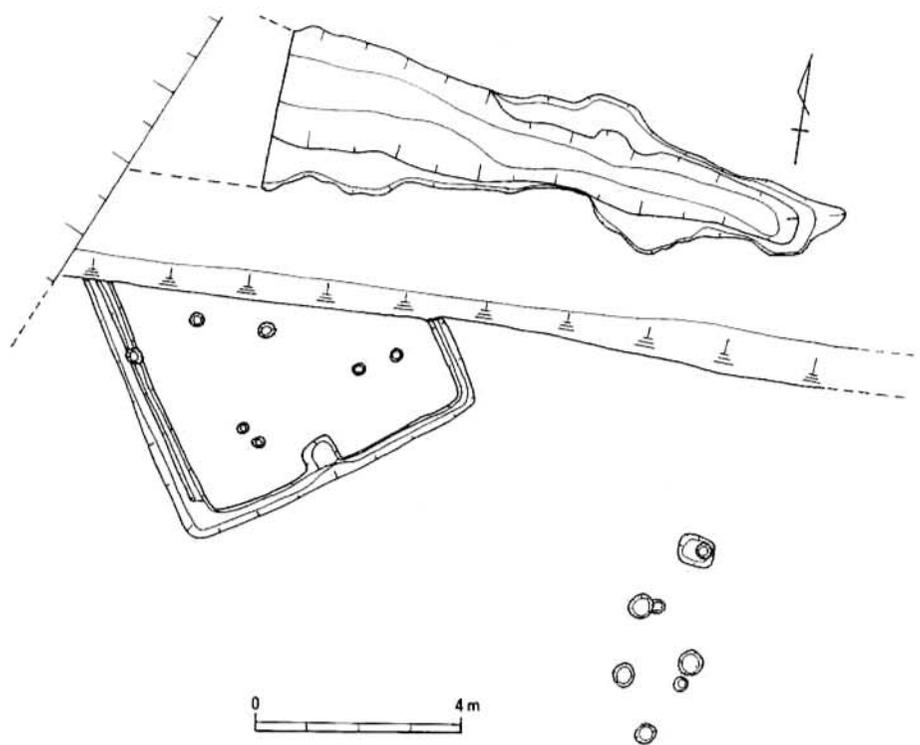
下岡田遺跡は、沖田川の小沖積台地に立地しており、古墳時代終末期から奈良時代にいたる（一部中世にかけて）集落関連遺構を中心とする遺跡である。この遺跡が所在する豊浦町大字室津上において、昭和62年度以降、農業基盤整備事業が進められることになり、山口県教育委員会では昭和61年度に県道の西側の上岡田地区について分布調査を行ない、遺構を確認した。そして、翌昭和62年度にこの上岡田地区の調査を行なった。また同年度内に、県道の東側の下岡田地区についても分布調査を行ない遺構が内在していることを確認した。そして山口県教育委員会では県耕地課と協議を行ない、事業計画の進展状況に合わせ事前に発掘調査を実施することになった。

調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、さらに山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行なうこととなり、昭和63年10月20日から同年12月16日まで実施した。

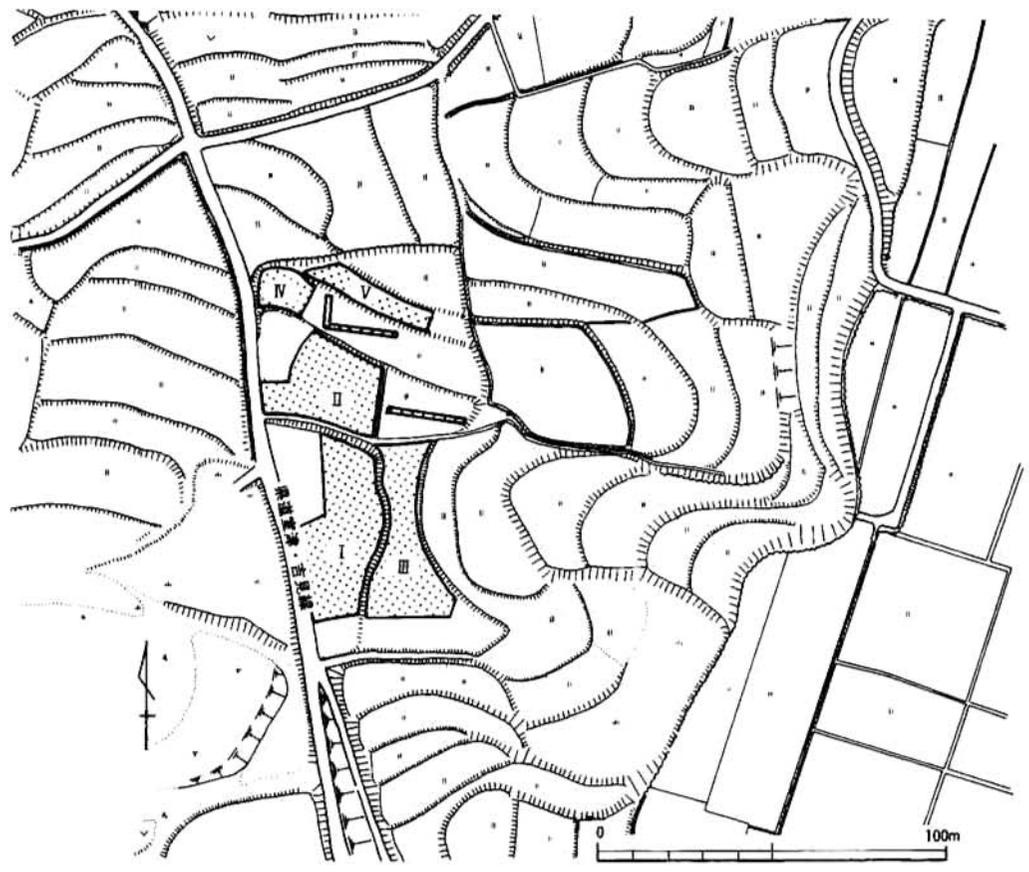
調査はその調査対象地区にトレンチを設定して、層序や遺構の広がり、分布密度等を確認し計5つの水田、およそ2,000㎡について面的な調査を行なうこととした。表土の除去には重機を用い、遺構面直上まで削ったのち、人力で遺構を検出した。各地区共基本的な層序は耕土、盤土を取り除くと黄橙色の地山面があらわれ、この面で遺構が検出された。大半の地区が一部厚い包含層で覆われ、厚さは深いところでは60cm～1mに及んだ。この包含層を取り除き、遺構を完全に検出した後、遺構の掘り込みに移った。遺構の掘り込みの後、その形状を記録するために実測・写真撮影等を行なって、現地での作業を終了した。



第2図 上岡田遺跡遺構



第3図 上岡田遺跡遺構実測図



第4図 調査区設定図

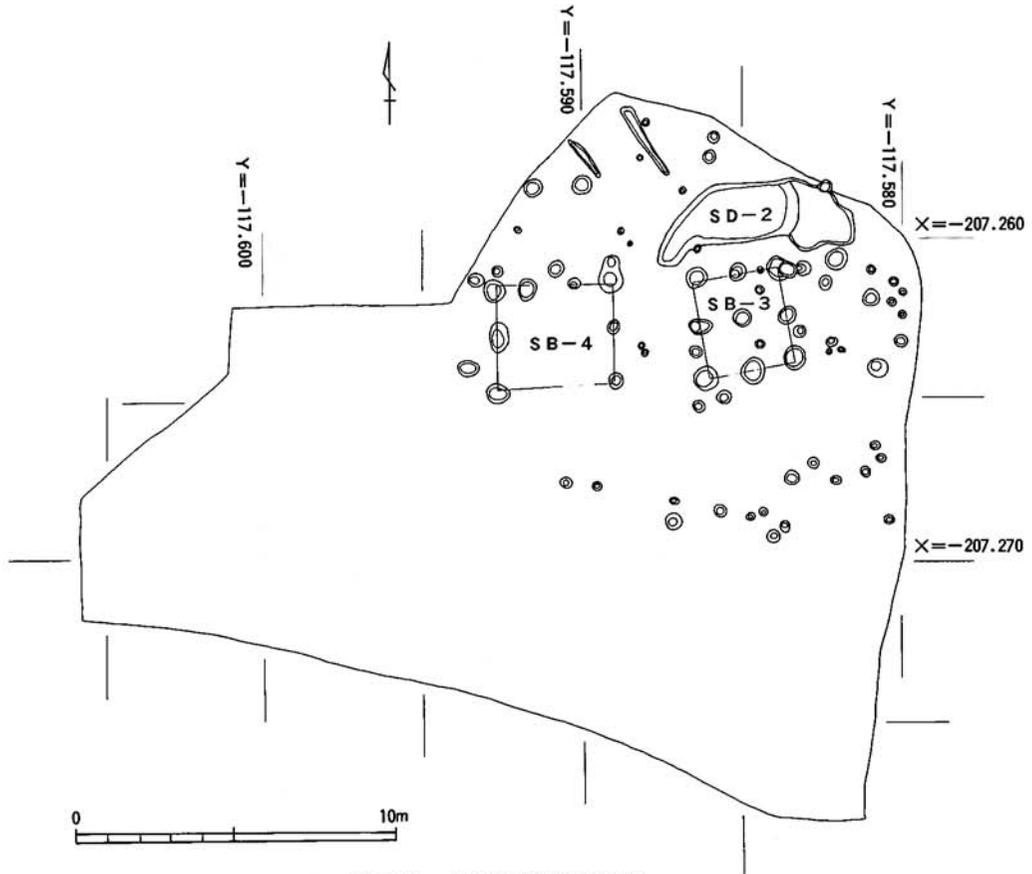
Ⅲ 遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、総数 700個を越える掘立柱建物の柱穴、溝3条、それに土壇が14基である。この遺跡はその約半分が遺物包含層によっておおわれていた。すなわちⅠ地区の東半分、Ⅲ地区の東半分、さらにはⅤ地区の大半である。Ⅰ地区についてはもともとの地表面が緩やかに傾斜しているため、この場所を水田化する際に西半分にあった遺構を削り、東半分に客土したものと考えられる。またⅢ・Ⅴ地区については、東側を流れる沖田川に通じる谷筋が入り込んでいるため、やはり水田化する際に遺構が存在していた高地の土を以って埋めたものと思われる。

この遺跡の西側にひろがる微高地上には、古墳時代後期の上岡田遺跡が存在していたので、この遺跡も上岡田につづく同時代の遺跡であろうと当初思われていた。しかし、出土した遺物からこの遺跡は古墳時代終末期から奈良時代、さらには中世にかけて営まれた集落の跡であることがわかった。以下、主な遺構について述べる。

1) 掘立柱建物 (第8図)

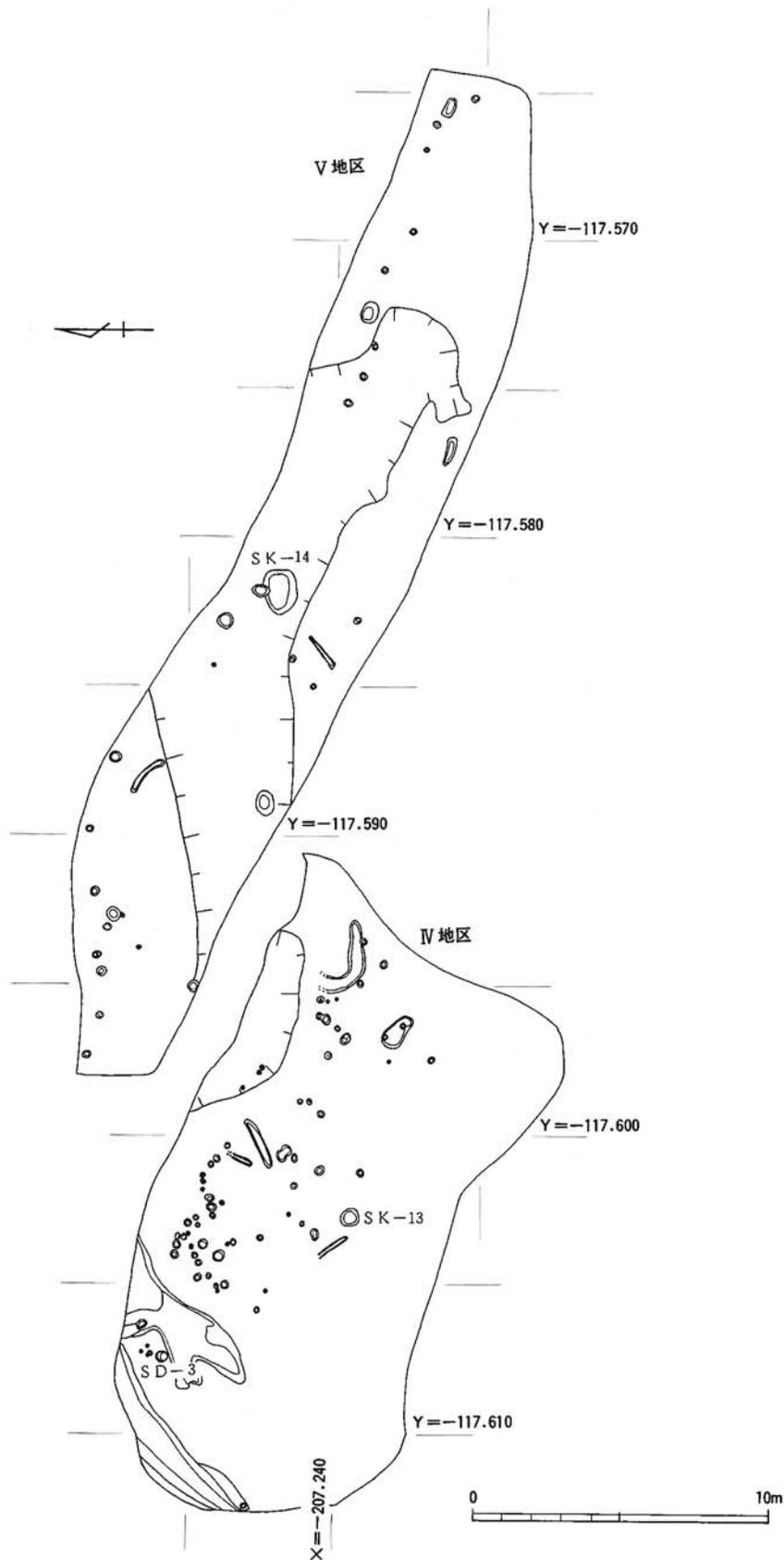
Ⅰ地区を中心におびただしい柱穴が検出された。これらは本来建物跡を構成していたので



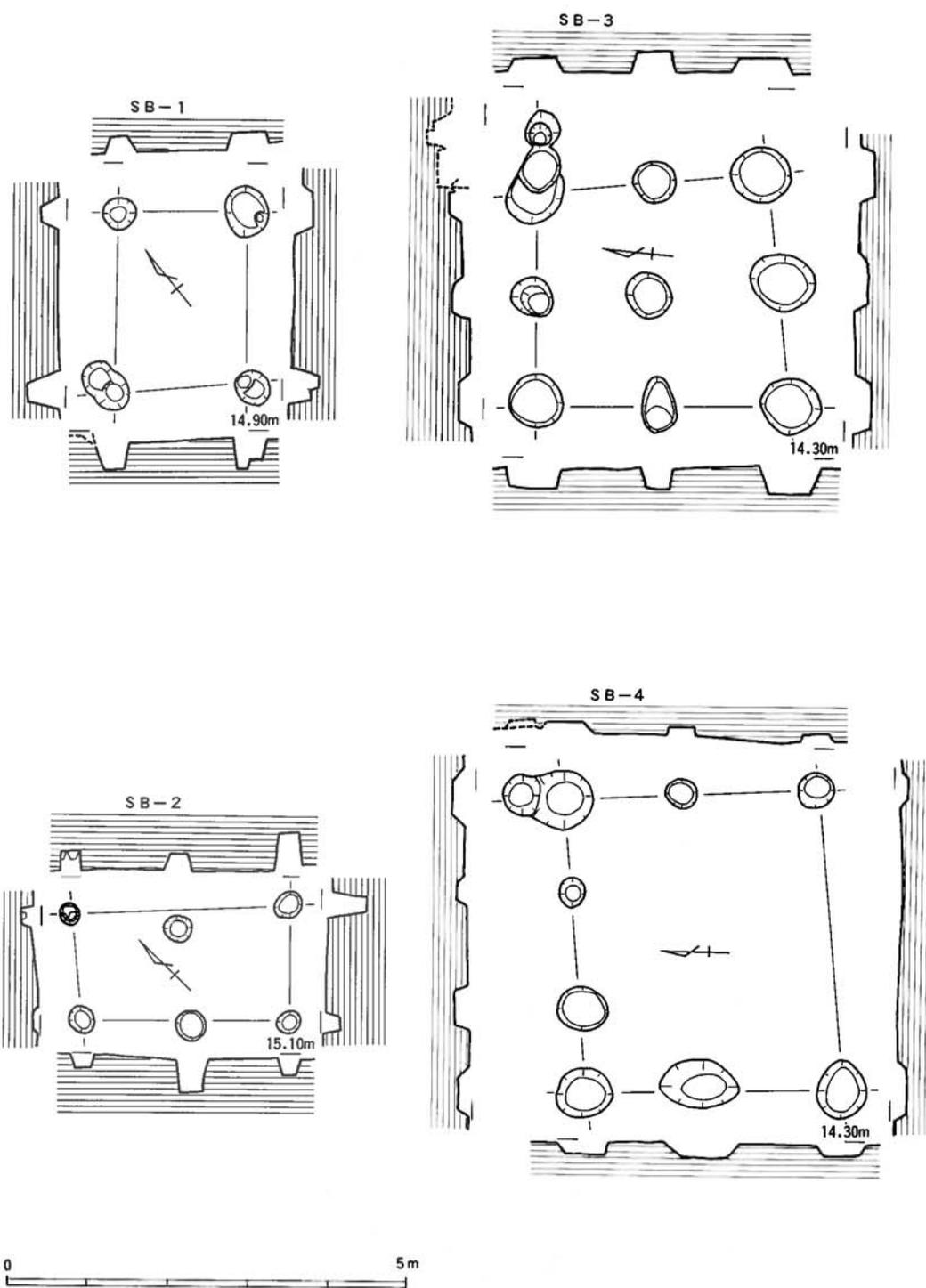
第5図 Ⅱ地区遺構配置図



第6图 I・III地区遺構配置図



第7图 IV·V地区遺構配置図



第8图 掘立柱建物实测图

あろうが、その内明確に復元し得るものは少ない。以下、概要を述べる。

SB-1 I地区北側に位置する、1間×1間の掘立柱建物である。棟方向を東西方向にもち、桁行長2.1m、梁行長1.6mを測る。

SB-2 I地区中央部に位置する2間×1間の建物である。やはり棟方向を東西方向にもつ。桁行長は2.6m、梁行長は1.4mを測る。柱間距離は桁方向で1.3mを測る。

SB-3 II地区中央部やや北寄りに位置する。2間×2間の総柱建物である。柱穴の大きさと総柱という点から倉庫と推定される。平面形はほぼ方形で柱間距離は平均で1.5mを測る。

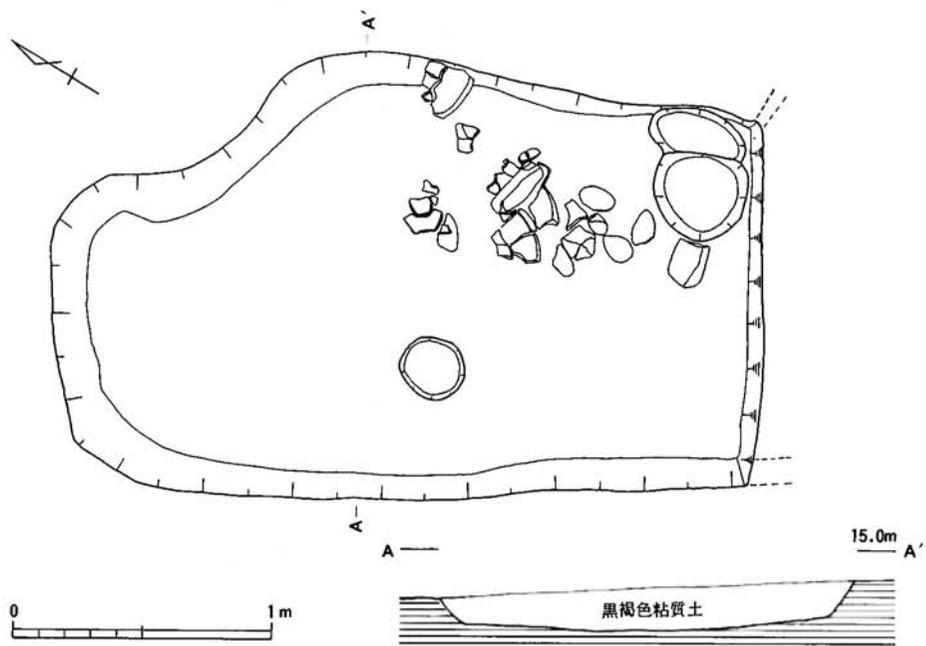
SB-4 SB-3の西隣に位置する2間×3間の建物である。SB-3同様、比較的大きな柱穴をもち、棟方向は南北方向で、桁行長3.6m、梁行長3.2mを測る。桁方向南側の柱穴2つは削平されて存在していない。柱間距離は桁方向で平均1.2m、梁方向で平均1.5mを測る。SB-3、4ともに遺物から7～8世紀の建物跡であると推定される。

また、I地区は柱穴の数が多く、出土遺物の中には中国製の磁器もあることから、少なくとも中世にわたって何度も建て替えられていたと考えられる。

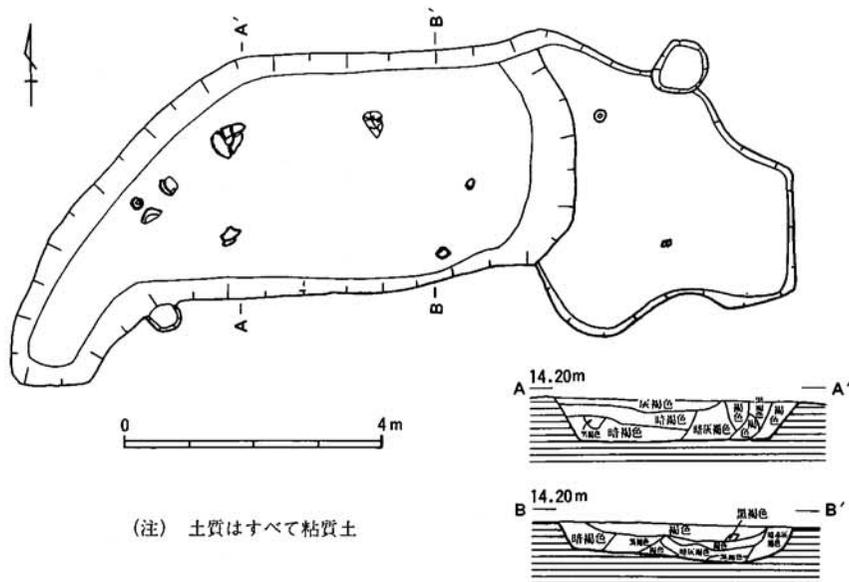
2) 溝および溝状遺構

I・II・IV地区からそれぞれ1条ずつ溝および溝状遺構を検出した。以下、その概要を述べる。

SD-1 (第9図) I地区の南端から検出された、北西から南東方向にはしり、そのまま南端の畔にぶつかる溝状遺構である。検出した範囲での長さ2.7m、最大幅1.7m、深さ10～19cmを測る。この溝状遺構から出土した土師器はいずれも中世のものであることから、この遺



第9図 SD-1 実測図



(注) 土質はすべて粘質土

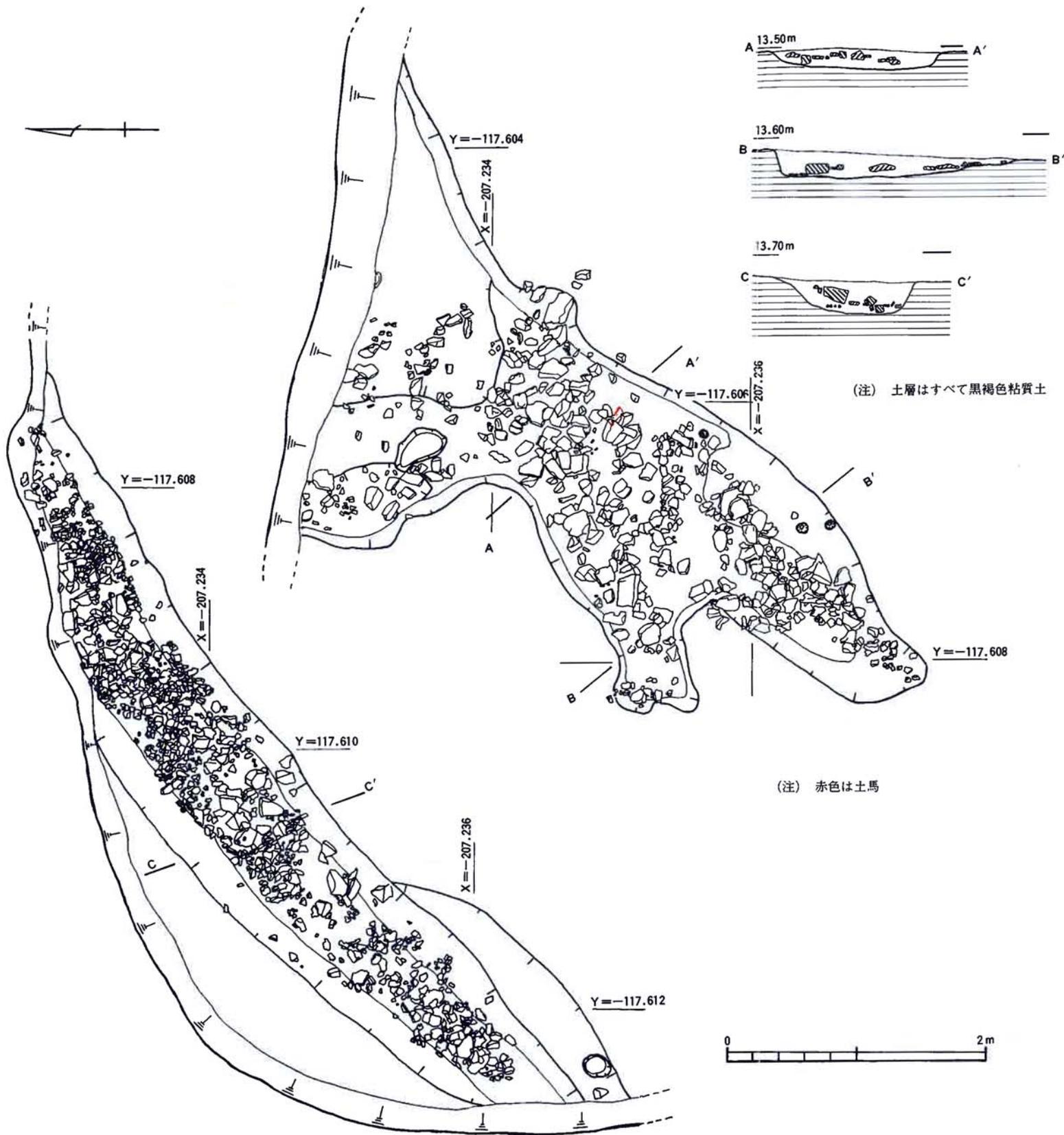
第10図 SD-2 実測図

構も同時代のものと推定されよう。

SD-2 (第10図) II地区の北側で検出された溝状遺構である。東西方向にはしり、長さ6.1m、最大幅2.2m、深さ20~32cmを測る。出土遺物は須恵器の杯蓋、杯身、碗それに横瓶である。これらの出土土器からこの遺構は8世紀のものと推定される。またこの同じ遺構から鉄滓が出土したことは興味深い。この鉄滓(図版10-1)は長径21cm、短径13cmを測り、かなり大きめのものである。IV地区のSD-3からも同じような鉄滓が出土していることから、この付近に同時代に鉄を鑄造する場所があったことがうかがえる。この溝状遺構を東西の端が消失しており、溝本来の姿をとどめてはいない。

SD-3 (第11図) IV地区の北側で検出された。北側の畔から南西方向にはしり、そのまま西側の畔にぶつかる。検出した範囲での長さ6.3m、最大幅1.1m、深さ24cmを測る。この溝の底面近くには、多くの小石が敷きつめられたかのように存在していた。その形状はきわめて不規則ではあったが、少なくともその小石の上部にあった比較的大きな石のように、単なる自然的な流れ込みとは考え難い。この溝からはSD-2と同様に、鉄滓が出土した。長径13cm、短径11cmを測り、先述したSD-2から出土した鉄滓よりもひとまわり小さい。

この溝のすぐ東側に、やはり石を大量にもつ溝状遺構が検出された。長さ4.9m、最大幅2.1m、深さ20cmを測る。SD-3ほどしっかりとした溝状を呈してはおらず、また石の形状も敷きつめたというにはあまりにも曖昧な状態であった。しかしこの溝状遺構は、その位置・形態からして、SD-3の一部ではないかと思われる。この遺構の東側の端、深さおよそ2cmのところから、下半部を欠損した須恵質の土馬が出土した。この土馬はおそらくは祭祀に用いられていたものであると考えられるが、出土状況および欠損部分の状態から、使用后、故意に破



第11図 SD-3実測図

壊され捨てられたものであろうと思われる。

さらにこの遺構の石の下から8世紀のものと思われる瓦の一部が出土した。この瓦は軒瓦なのか平瓦なのかははっきりしない。また、これらの遺構からは他に、須恵器片・土師器片が多量に出土した。時期も瓦とほぼ同じ時代のものであると考えられる。これらの遺構は当時の集落機能を考える上で、非常に興味深い。

3) 土壌 (第12図)

計14基の土壌を検出した。その大半は6世紀後半から7、8世紀にかけてのものである。ただし、1基ほど中世のものとみられる土壌が検出された。以下、主なものについてその概要を述べる。

SK-1 I地区北側より検出された。平面形はほぼ円形で、深さは30cmを測る。この土壌からは、須恵器の杯蓋と土師器の高杯がそれぞれ出土した。時期的にはこれらの出土遺物からみて、6世紀後半と考えられる。

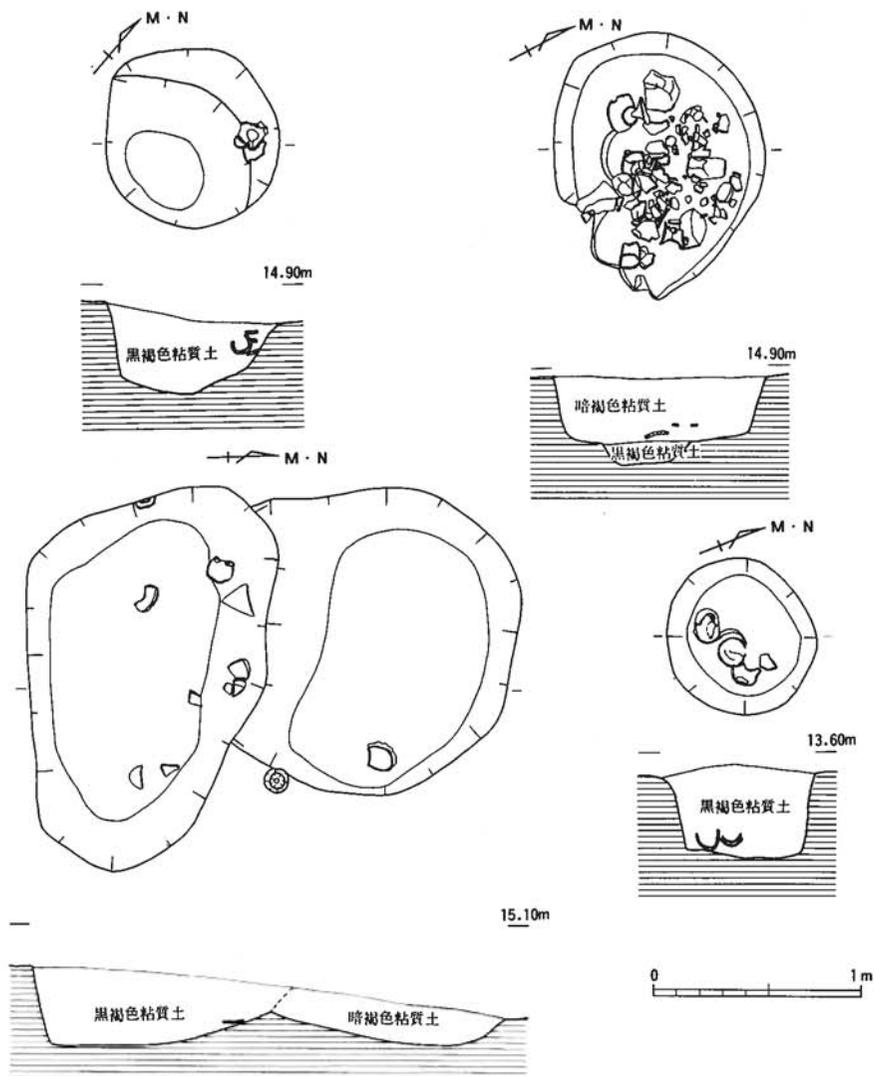
SK-2 SK-1のすぐ南西から検出された。長軸110cm、短軸90cm、深さは36cmを測る、楕円形の土壌である。この土壌からは少なくとも11個の土師器の高杯と、土師器の甕、椀がそれぞれ1個ずつ出土した。なお、須恵器は破片すら見当たらなかった。土師器の高杯がこのように多く出土し、しかもその出土状態が捨てられたものであるとは考え難いことから、この土壌は祭祀遺構の可能性があると考えられる。時期的には6世紀後半のものであると推定される。なおこの土壌の底部は二重に掘り込まれていた。

SK-1、2ともにごく近隣から検出されていること、また規模がほぼ似かよっていること、また出土遺物が同時期のものであることから、この二つの土壌は同時代に祭祀的な場として使

遺構 番号	平 面 形	規 模 (cm)			主 な 出 土 遺 物
		長 軸	短 軸	深 さ	
1	円 形	76	75	30	須恵杯蓋・土師高杯2
2	楕 円 形	110	90	36	土師小甕・土師椀・土師高杯11
3	長 円 形	110	84	18.5	
4	長 円 形	110	78	20	
5	長 円 形	154	103	32	須恵杯蓋・杯身2・土師高杯
6	楕 円 形	(135)	131	17	須恵杯身
7	楕 円 形	385	286	60	土師杯・鍋 (一部)
8	円 形	126	120	22	
9	楕 円 形	82	60	12	
10	長 円 形	90	60	25	
11	長 円 形	100	68	30	
12	長 円 形	98	62	18	
13	円 形	67	64	40	土師小壺・土師椀2
14	長 円 形	150	108	23	

土壌一覧表

() は推定値



第12図 土壙実測図

用された可能性があるものと思われる。

SK-5・6 I地区中央部やや北寄りから検出された。SK-5がSK-6を切る。5は長円形の土壙で、長軸154cm、短軸103cm、深さ32cmを測る。6は楕円形で、長軸135cm、短軸131cm、深さ17cmを測る。5からは須恵器の杯蓋、杯身、土師器の高杯などが出土し、6からは須恵器の杯身が出土した。双方とも時期的には7世紀のものであると考えられる。

SK-7 III地区中央部から検出。かなり大きな土壙で、長軸385cm、短軸286cm、深さ60cmを測る、楕円形を呈する土壙である。土壙内には破棄された状態の石や礫が無数に存在していた。それらに混じって、土師器の杯と小皿、さらには鍋の口縁部が出土した。これらのことから、この土壙は中世の初頭のものであると推定される。

SK-13 IV地区の中央部から検出された。長軸67cm、短軸64cm、深さ40cmのほぼ円形を呈するやや小さな土壙である。出土遺物は土師器の壺と椀。時期的には6世紀の後半のものと考えられる。

IV 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、磁器、土製品、瓦などがあるが遺構の数に比べて遺物の量は多く、その半分以上は遺物包含層から出土した。時期的には7、8世紀のものが多い。以下、主な遺物について、概要を述べる。

1) 土器

SK-1・2出土 (第13図) 1は須恵器の杯蓋。平坦な天井部からゆるやかに屈曲しながら体部が開き、口縁部は丸みを持つ。天井部は回転ヘラ削りの後不整方向のナデ、天井部内面は不整方向にナデ、他は回転ナデ調整。2は土師器の高杯の一部である。脚部は短く、体部は直立に近くなる。口縁部は欠損。外面はヨコナデ調整。

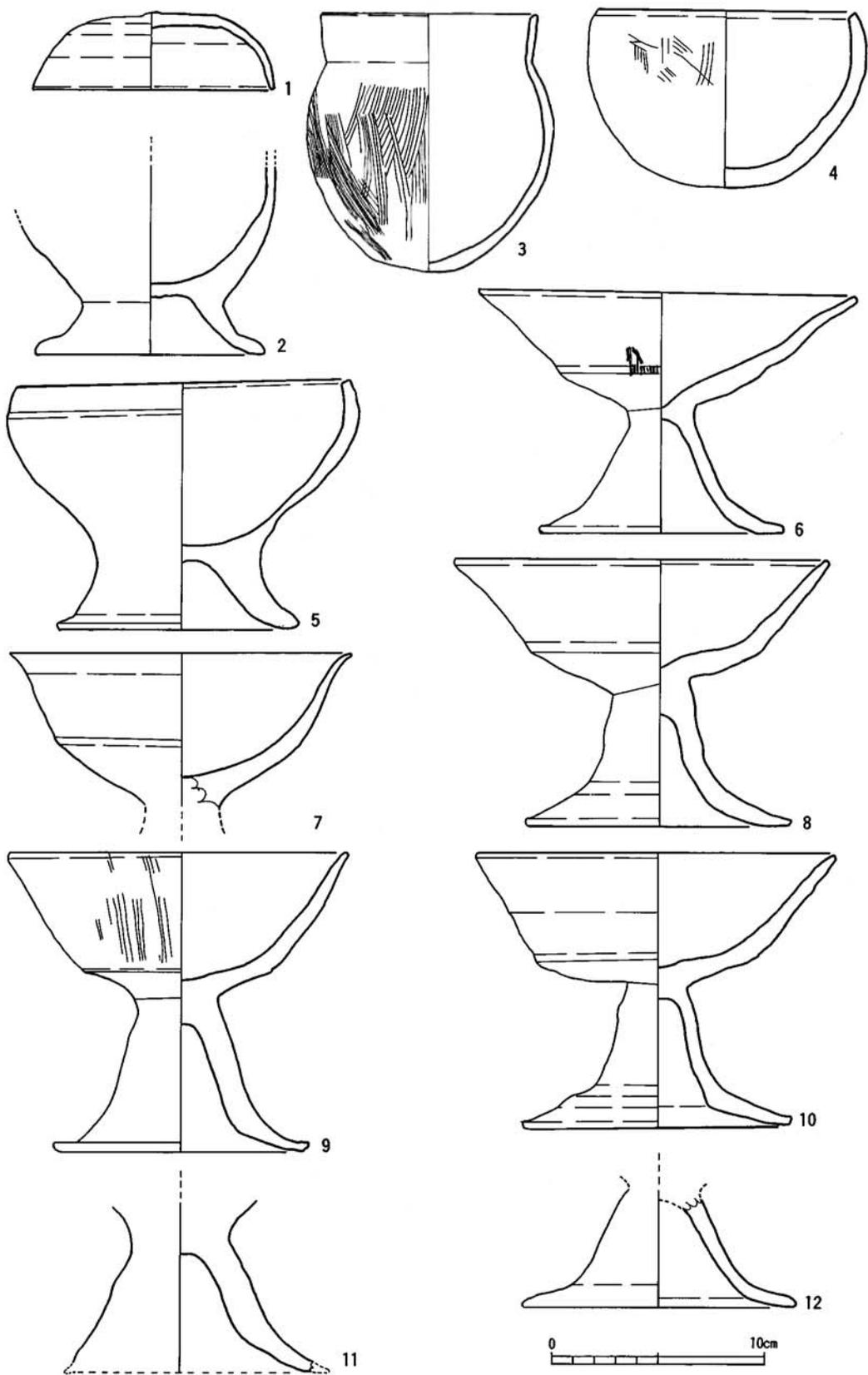
3~12まではSK-2から出土したものである。3は土師器の小型甕で、底部は丸く、口縁部は直立に近い。内外面ともヨコナデ調整で、体部には右下・左下方向にそれぞれハケ目がはしる。底部外面には須恵器に見られるような記号状の刻文が付けられている。4は土師器の碗。これも丸底で口縁部は内湾する。体部外面に一部ハケ目が残っているものの、大部分は摩耗し、調整は不明。

5~12は土師器の高杯である。5・7は碗状の杯部を持つもので、5は、退化した脚部を持つ。口縁部はわずかに内傾する。内外面ともにヨコナデ調整。7は口縁部が外反するもので、脚部を欠損する。器面摩滅のため、調整不明。6は杯部の浅いもので、脚基部より直線的に広がり、杯部中位に形式的な稜を持つ。脚部の裾は折れて水平に近く曲がる。外面はヨコナデ調整で一部にハケ目がある。内面は摩耗し調整不明。8~10は杯底より鈍い稜をなして直線的に上外方に立ち上がる。脚部は、裾付近で急激に広がる。なお、8・10は内外面ともヨコナデ調整。9はタテ方向にハケ目を持つが、内外面ともに摩耗が著しく、調整は不明である。11は脚部と杯部のわずかな部分、12は脚部の一部しか残存しておらず、双方ともに脚部の裾は大きく屈曲する。11は内外面とも摩耗し、調整不明。12は内面がヘラ削り、外面はヨコナデ調整。

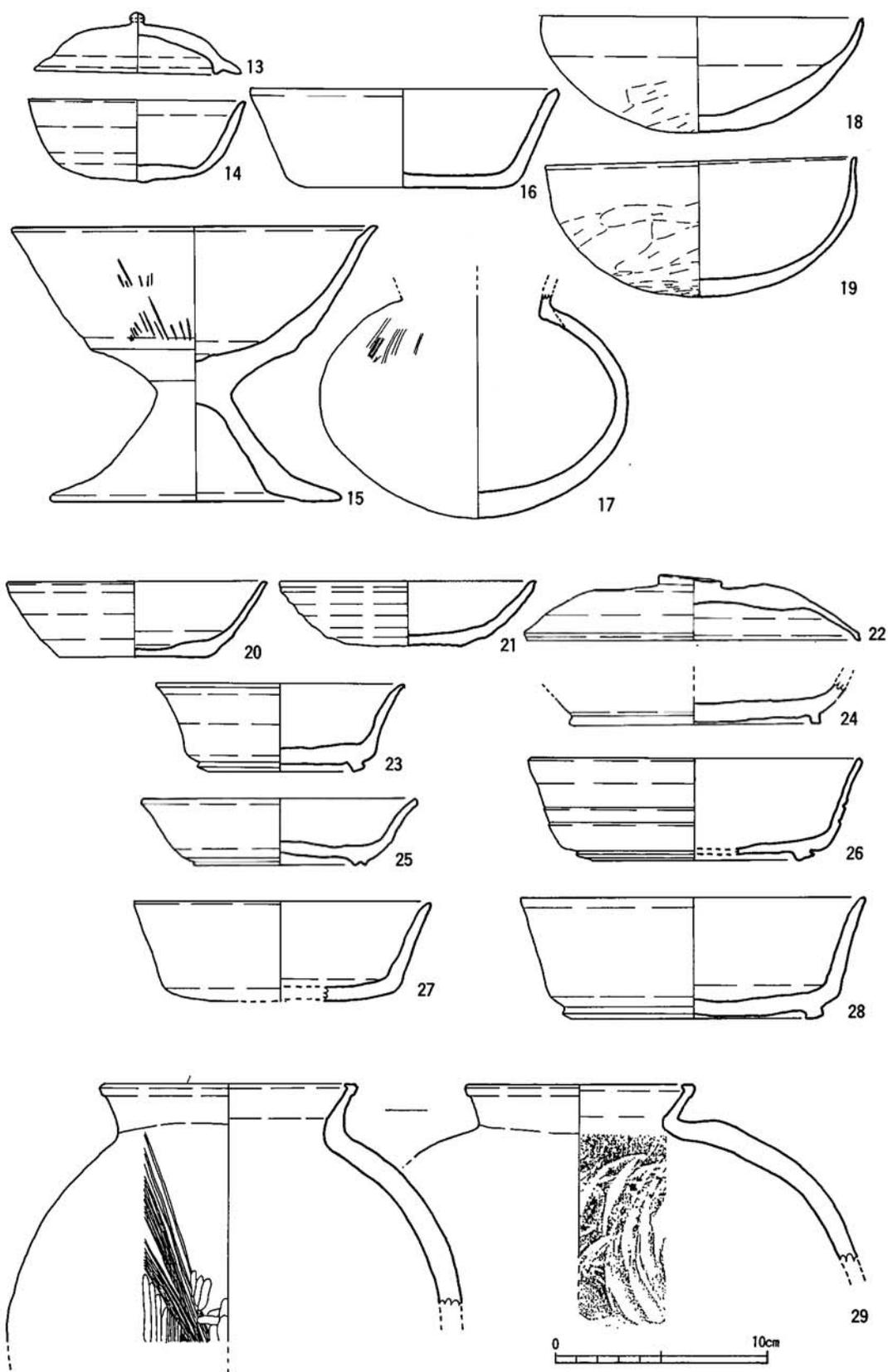
2・5~12までの高杯は7を除いていずれも脚部が短い。総じてSK-1・2の須恵器・土師器は6世紀後半に比定し得るものと考えられる。

SK-5・6出土 (第14図 13~16) 13は須恵器の杯蓋である。宝珠状撮みを有し、口縁部内面にかえりを持つ。内外面とも回転ナデ調整を基調とする。14は杯身で、やや丸みを帯びた底部から屈曲して立ち上がり、口縁に至る。内外面は回転ナデ調整。15は土師器の高杯でSK-1・2で出土した高杯と同様な形態を呈する。内外面ともに回転ナデ調整で、杯部外面の一部にタテ方向にハケ目がはしる。SK-6出土の16は須恵器の杯身で、平坦な底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は丸みを持つ。これも内外面とも回転ナデ調整を基調とする。

SK-13出土 (第14図 17~19) 17は土師器の壺である。底部は丸く、大きく内湾しながら立ち上がり、体部上位で急激に屈曲して口縁部に至り、やや外反する。なお口縁部は僅かし



第13图 出土遺物実測図 (1)



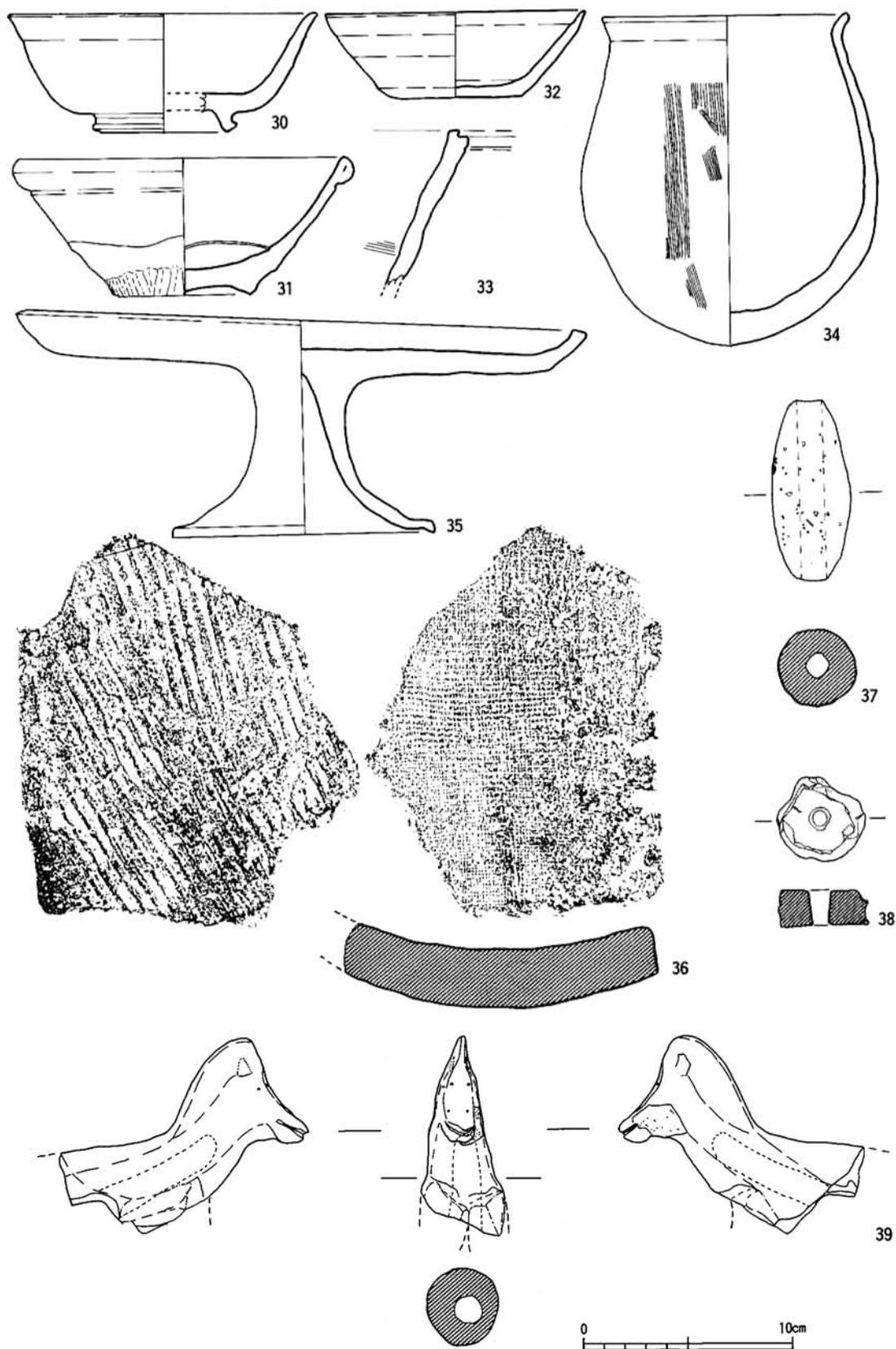
第14図 出土遺物実測図 (2)

か残存していない。その僅かに残った口縁部外面にヘラ磨きの跡がうかがえる。またそれにつづく体部上位にタテ方向にハケ目が認められるが、あとは内外面とも摩耗しており、調整はさだかではない。18・19はいずれも土師器の椀である。双方とも丸底からゆるやかに内湾気味に立ち上がり、19の口縁部はほぼ直立し、その端部はわずかに外反する。双方とも口縁部外面はヨコナデ調整、体部から底部にかけてはヘラ削りを施している。内面はいずれも摩耗につき、調整は不明である。

SD-1 出土 (第14図 20・21) 20・21ともに土師器の杯と皿である。どちらも平坦な底部から20はやや直線的に、21はゆるやかに立ち上がる。口縁部はどちらも丸みをもつ。20・21ともに底部は回転糸切り、体部は内外面とも回転ナデ調整。

SD-2 出土 (第14図 22~29) 22は須恵器の杯蓋である。扁平な撮みを有し、天井部は膨らみをもつが、これは焼成の際の火膨れと思われる。口縁部はほぼ直立する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向に静止ナデが施される。他は回転ナデ調整。23~26・28はいずれも八の字形に付された高台をもった杯身である。23・26・28は底部から急激に屈曲して立ち上がり口縁部はわずかに外反する。体部内外面とも回転ナデ調整で、26は体部中位に沈線をもつ。24は口縁部・体部上位が欠損。25は底部からいくぶんゆるやかに屈曲して立ち上がり、口縁部はやはり外反する。24・25ともに体部両面は回転ナデ調整。27は高台をもたない杯身である。底部の部分に欠損する。これも鋭く屈曲して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸みももちやや外反している。内外面ともに回転ナデ調整。29は横瓶である。体部下位と底部に欠損する。体部中位から内湾しながら口縁部の手前で屈曲し、口縁部は外反するが、その端部はわずかに内湾する。体部上位から中位にかけて、右下方向にハケ目を施し、またヘラ磨きを有する。これらの出土土器は8世紀に比定し得るものであると考えられる。

その他の遺構・包含層出土 (第15図 30~35) 30はI地区の柱穴から出土した須恵器の杯身である。これは先に述べた23・26・28と同様の形態を呈している。口縁部は回転ナデ調整、体部は両面とも回転ヘラ削りである。31は同じくI地区の柱穴から出土した中国製白磁である。底部は輪高台で、口縁部は玉縁状に大きく膨らむ。釉薬は内面および体部外面まで施す。高台わきから高台内にかけては無施釉。高台わきは、ヘラ状工具でタテ方向に削り出しを施す。時期は13世紀に比定される。おそらくはこの土地の有力者が所有していたものであろう。32・33はIII地区のSK-7出土の土師器の杯および鍋の口縁部である。32は内外面ともに回転ナデ調整で、底部は糸切り、33は口縁の端部外面が大きく凹んでいるところに特徴がある。また、体部内面に若干のハケ目が見られる。しかし、体部中位以降を欠損しているため詳細は不明。34はIII地区の包含層より出土した土師器の甕である。丸底から内湾しながら立ち上がり口縁部で屈曲してわずかに外反する。体部外面にタテ方向のハケ目が残るが、器面は摩耗して調整は不明である。35はV地区の包含層より出土した須恵器の脚付きの盤。底部の裾は屈曲して立ち上がり、脚部上位で大きく外方に広がり口縁の端部は平坦である。盤部内面は不整方向にナデ



第15图 出土遺物実測図 (3)

調整。口縁部は回転ナデ調整で、盤部外面から脚部までは回転ヘラ削りを施す。脚部内面は回転ナデ調整。

2) 瓦・土製品 (第15図 36~38)

36はⅣ地区のSD-3の一部の溝状遺構から出土した瓦の一部である。凸面は淡橙褐色で凹面は淡灰褐色、凸面に太くてやや粗い縄目叩きを有し、凹面には細かい布目痕が見られる。この瓦は8世紀に比定し得るものであると考えられる。

37は双孔棒状土錘、38は土製紡錘車である。37は長さ8.5cm、厚さ3.7cm、孔径1.1cmを測る。38は径4.2cm、厚さ1.7cm、孔径0.7cmを測る。双方ともⅢ地区の包含層から出土した。

また、この他にⅣ地区の表採ではあったが、土製模造鏡が出土した(図版10-5)。この模造鏡は面径3.6cm、厚さ0.9~2.3cmを測り、紐をつまみ出して鏡面に平行に穿孔する。

3) 土馬 (第15図 39)

39はⅣ地区のSD-3の一部から出土した須恵質の土馬である。灰白色を呈し、下半部を欠損する。この土馬は手綱・鞍などの一切の装飾を持たない裸馬である。表面は全体的に摩耗しているが、体面上位の様相から、指圧の後ナデによる仕上げを施したものであると思われる。目、鼻、口はいずれもヘラ状工具で素朴に施され、耳や鬃もはっきりと表現されている。県内で出土した他の土馬に比べ、表現は写実的である。胴体の内部ほぼ中央には頸部あたりまでの孔がみられる。これは成形の際、芯棒を内に入れて作ったものの痕跡とみられる。欠損部分の断面からして、おそらくは一度粘土を芯棒のまわりになでつけ土馬の基本形態をつくった上で、あらたに脚部や顔面の細々としたところを成形させて仕上げたものであろうと思われる。土馬の作り方としては稀有な例といえよう。

V まとめ

山口県の西端は、響灘に沿って南北に海岸線が延びる。海岸線に沿った南は下関から北の豊北町にかけては、古来「豊浦郡」の地である。響灘の海岸線の中央部にある豊浦町は、したがって、一衣帯水の間には韓半島および大陸と対峙している。

沿岸部にはさして大きな平野は発達していないが、この豊浦町の辺りは少し開けた川棚の海岸平野を有し、室津湾をもって自然の良港となし、温暖にして山海の幸に恵まれ、そのことが早くから新しい文化を受け入れる基盤となり、のち長く生活文化が定着し発展した地域であった。したがって豊浦町域には、第Ⅰ章で示したように、現在もなお数多くの遺跡が残されている。

川棚の平野は、吉永と涌田の丘陵によって南北に分かれている。南の平地は吉永川と黒井川によって形成された沖積扇状地と、八ヶ浜の砂堆から成る。北の川棚川一帯には、旧石器時代の遺跡を除いても、どちらかといえば、中ノ浜遺跡や向日山遺跡に代表される弥生時代の遺跡

をはじめとする比較的古い時代に属する遺跡が分布し、これに対して、南の平地とその周辺には、古墳時代以降の遺跡が顕著に認められる。

下岡田遺跡は、室津湾に臨むこの南の黒井平地の西南、沖田川に添った丘陵端の河岸段丘上に位置している。第1図に示したように、この辺りには、古墳時代の遺跡の密度が高く、なかでも甲山古墳群は100基近くの横穴式石室墳で構成する県下最大の群集墳として著名である。

室津湾の南の汐汲遺跡から八ヶ浜にかけては、長さ1km・幅7～80mにわたる旧砂丘の名残が見られ、汐汲遺跡に見られるような古墳時代の初めないしそれ以前の埋葬跡がかつては残されていたと想像できる。その様子は、ちょうど北の川棚川下流の旧砂丘上に営まれた中ノ浜のそれに対応する。

6～7世紀にかけての古墳群はあれど、その時代の人々が生活した集落遺跡はあまり知られていなかった。しかし先年この沖田川に添って県道室津・吉見線の拡張工事がなされた際上岡田遺跡が発見され（『豊浦町史』参照）、さらに昨年圃場整備のためこの遺跡が調査され、古墳時代の集落遺跡が確認され始めた（第Ⅱ章参照）。

上岡田遺跡では、調査面積は少なかったが、古墳時代後期の方形の竪穴住居1軒と、これを囲堯する溝、掘立柱建物群などが発見されている。同時代の集落で使われた須恵器と土師器の一括資料は、山口県の遺跡にこれまで見られなかった良好な資料を提供し、溝からは、集落の遺構から発見されることの少ない耳環の出土を見ていることも興味深い。

下岡田遺跡は、上記遺跡の同じ丘陵端に続く段丘上にあり、同じ時代の集落跡が発見されると予測していたが、報告のとおり、古墳時代から奈良時代（一部中世にかけて）の遺構がまともなく発見されている。

特に集落を構成する遺構群が、掘立柱の建物を除くとその性格を判然とするものが少ない。

特筆すべきものは、古墳時代では土師器の高杯をたくさん納めたpitなどの、祭祀関係の遺構とおぼしきもの、奈良時代では、石敷きの溝と土製の馬を納めたpitなど、これも祭祀関係の特殊な遺構である。

遺跡の大部分が後世の水田のため階段上に削平されていて、遺構群が寸断されているのと、上岡田遺跡側の高位にある遺跡が削られ、低位に客土として盛られたため、下岡田遺跡の上方堆積層はこの包含層となっている。遺物の出土量の大半はここからのものである。

しかしこれらの土器を主とする一括遺物は、古墳時代後半から奈良時代にかけての、この地域のまとまった資料として、汐汲遺跡出土の土器類を補強するものとなった。

周辺に多く見られる古墳群は、黒井平地の周辺部の段丘上およびこの頃から集落立地として開発されていったと考えられる砂丘上に、両岡田遺跡のように散在している可能性が高くなった。

甲山古墳群が造営された時期はその下限が奈良時代に至ることがわかっているが、下岡田遺跡の集落の営まれている時期とも一致する。被葬者の集落が両岡田遺跡一帯にあったとは断定

できないが、その可能性も予測できよう。

今回の発掘調査で特に興味深いのは、奈良時代にはいる遺物の出土である。なかでも土製の馬、馬の下にこれを載せる台のようにして横たわらせてあった布目瓦、祭祀用に用いられた可能性の高い脚付きの盤などは、この地域としては初めての資料であろう。

土製の馬は、山口県下では日置町長行黒川遺跡、防府市周防国府跡（2例）、防府市末田窯跡、防府市佐波川河口周辺の資料に次ぐ6例目となる。石製の馬は、宇部市の波雁ヶ浜遺跡から出土している。長行黒川遺跡の土製の馬は、飾り馬として馬具の表現が施されているが、下岡田遺跡のそれは、馬具の表現の見られない裸馬である。

ともに古墳時代の後期から見られるが、この場合は、共伴した遺物を考えると、奈良時代（8世紀頃）と考えてよい。土製の馬を用いる祭祀は、水の神を祈る場面が一般的である。

石を敷いていねいに作られた溝の近くの土壌からの出土は、集落の生活水かあるいは、水田に引く用水のための祈りが行なわれたことを想像するに十分である。

伴出した瓦は、平瓦か軒瓦の一部か判然としないが、奈良時代に属すると見てよい。

この時代の瓦の需要を考えると唐突な出土資料といえる。しかも脚付きの盤は当時地元で作られたものとは思えず、この地への搬入品であろう。

奈良時代のこの遺跡の状況は今ひとつつかみ切れないが、今後の調査では、あるいはこの時代の役所か寺院などの遺跡が発見される期待を抱かせる。

甲山古墳群に奈良時代にかけて、追葬可能な横穴式石室の古墳が100基近くも作られていることと何か歴史的なつながりがあるならば、あるいは豊浦の地の持つ歴史的な意味合いは、深いものになるように思える。

須恵器・土師器などの一括土器の分析は、良好な資料だけに機会を改めることにしたい。



調査区全景



調査区全景（南から）

図版第2



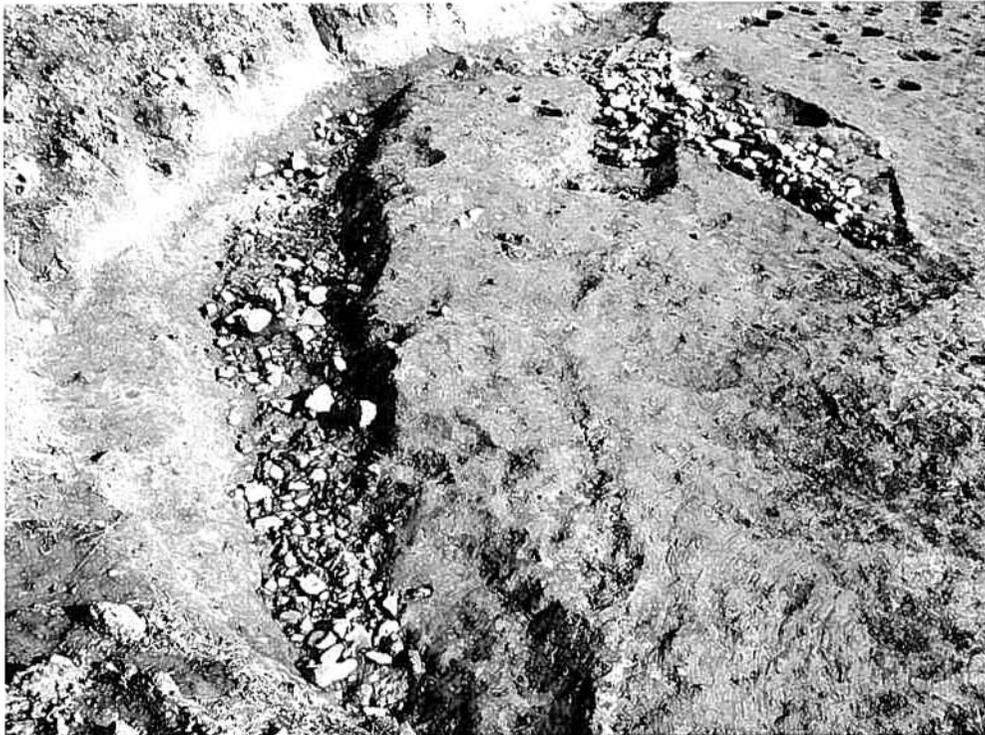
I・III地区全景（北から）



II地区全景（南から）



IV・V地区全景（北西から）



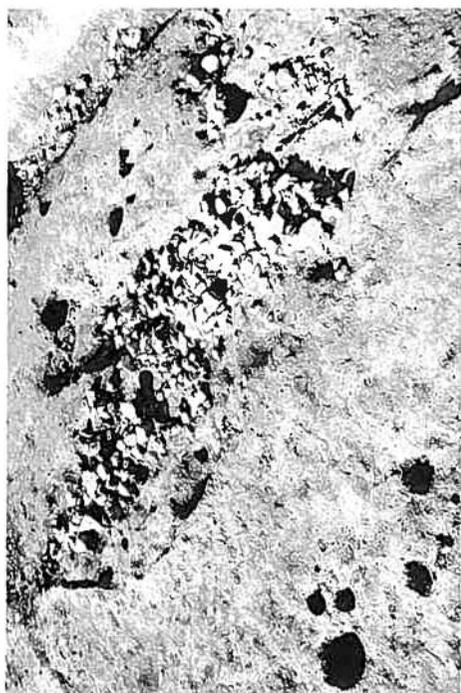
SD-3（西から）



SD-3 内土馬出状



SD-2 内出状



SD-3 一部 (東から)



SD-2



SK-2



SK-7

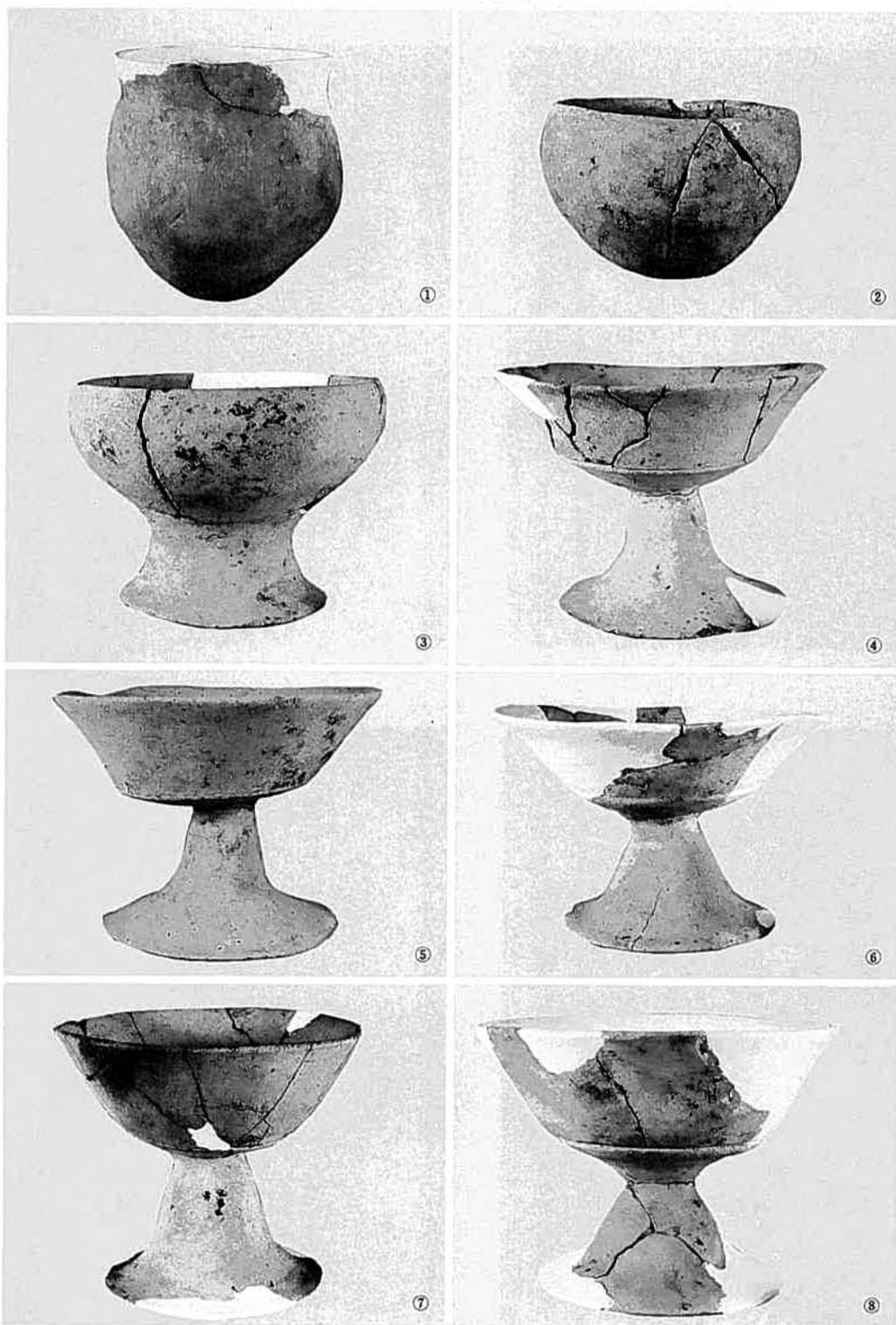


SK-1

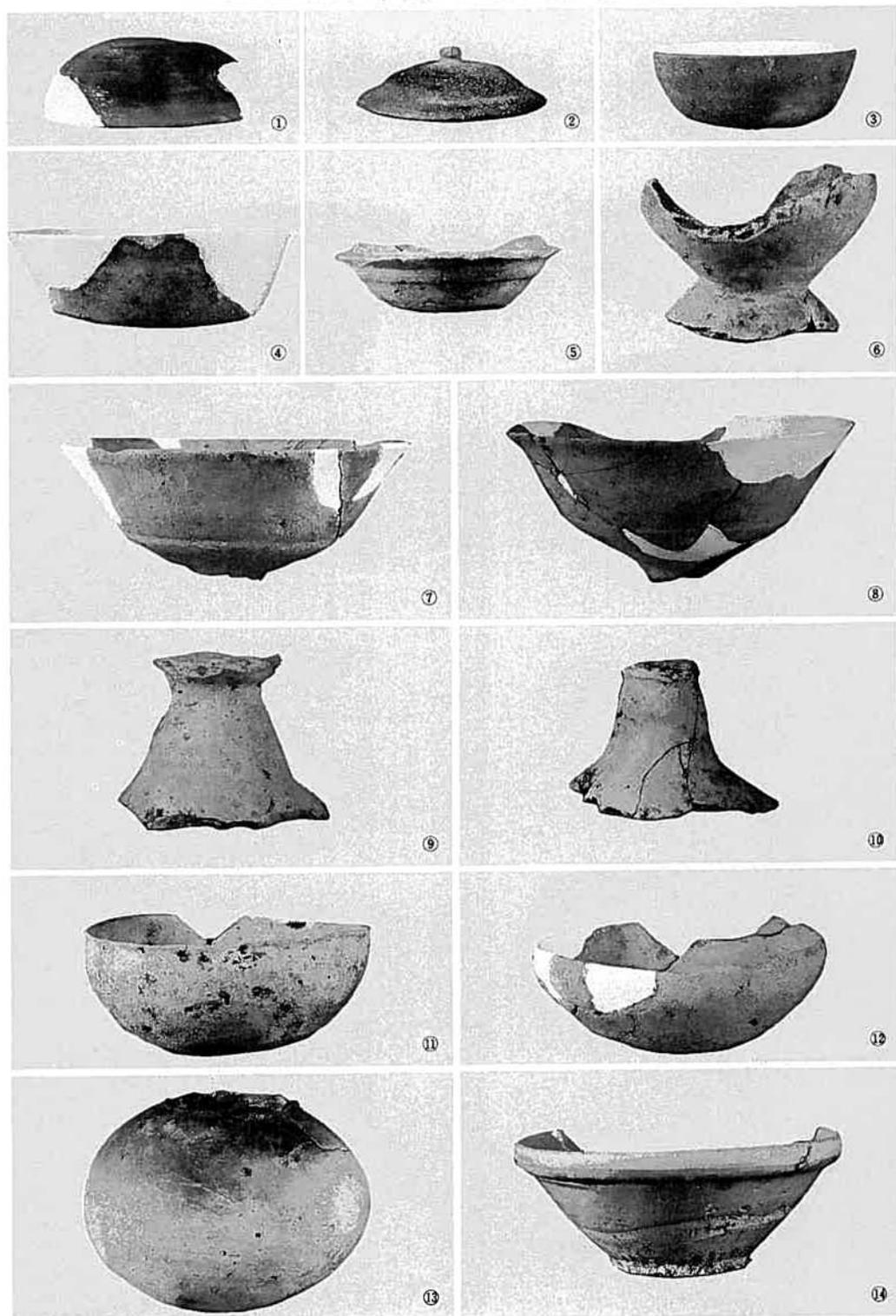


SK-5 (左)・6 (右)

図版第6

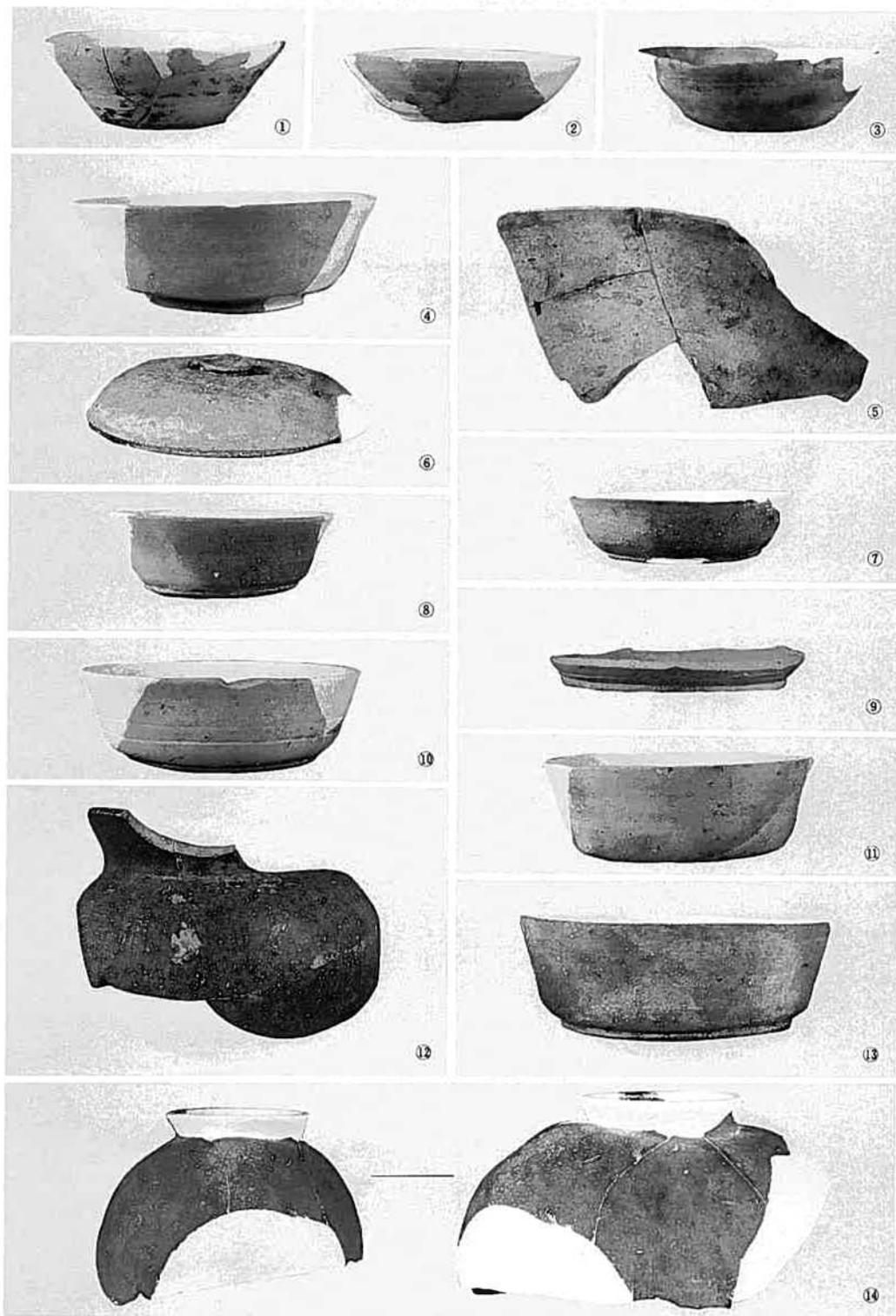


① 土師器小甕(SK-2) ② 土師器椀(SK-2) ③~⑦ 土師器高杯(SK-2)
⑧ 土師器高杯(SK-5)

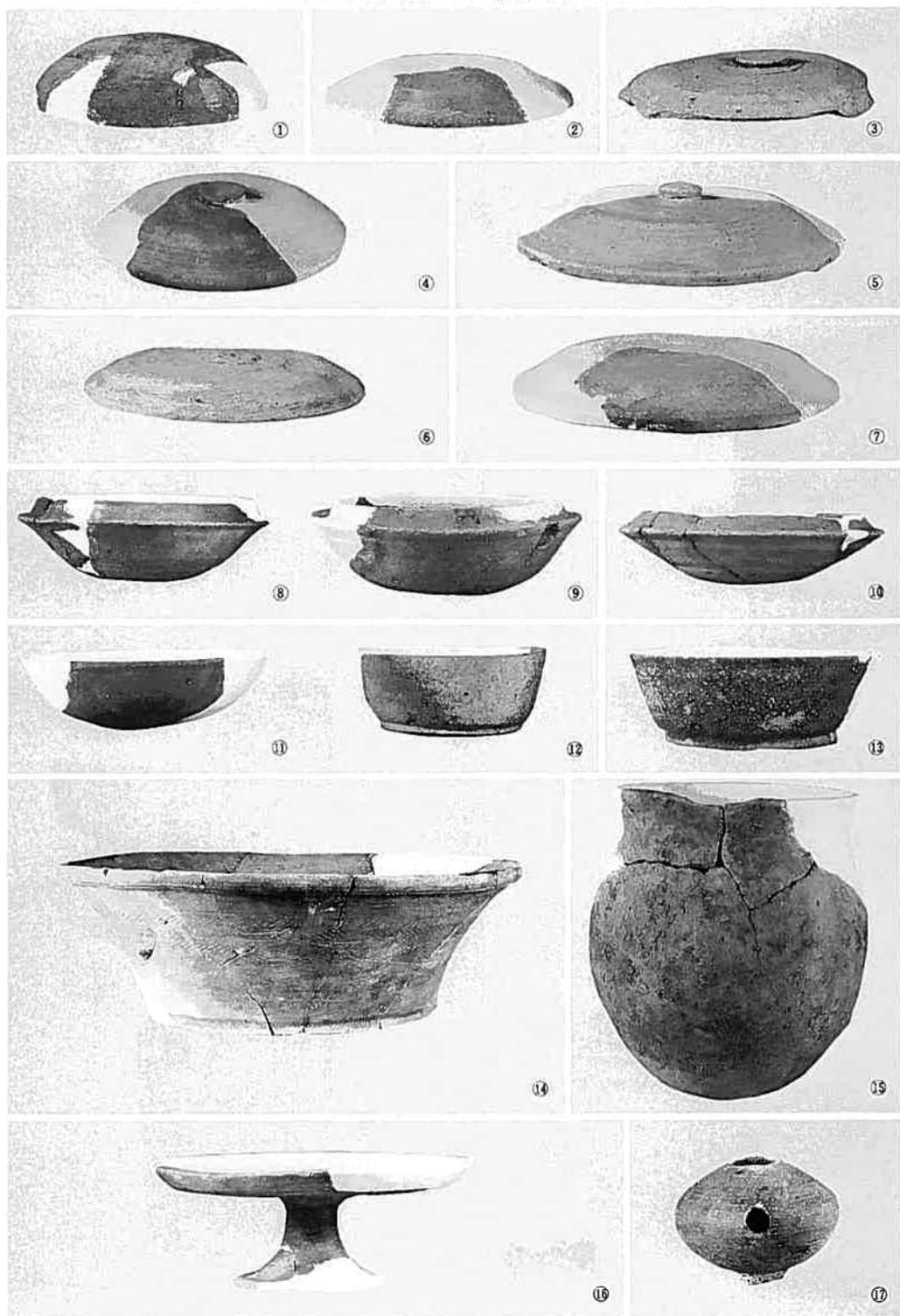


① 須惠器杯蓋(SK-1) ② 須惠器杯蓋(SK-5) ③·⑤須惠器杯身(SK-5)
 ④ 須惠器杯身(SK-6) ⑥~⑨ 土師器高杯(SK-2) ⑩ 土師器高杯(SK-1)
 ⑪·⑫ 土師器碗(SK-13) ⑬ 土師器小壺(SK-13) ⑭ 白磁(I地区柱穴)

図版第8

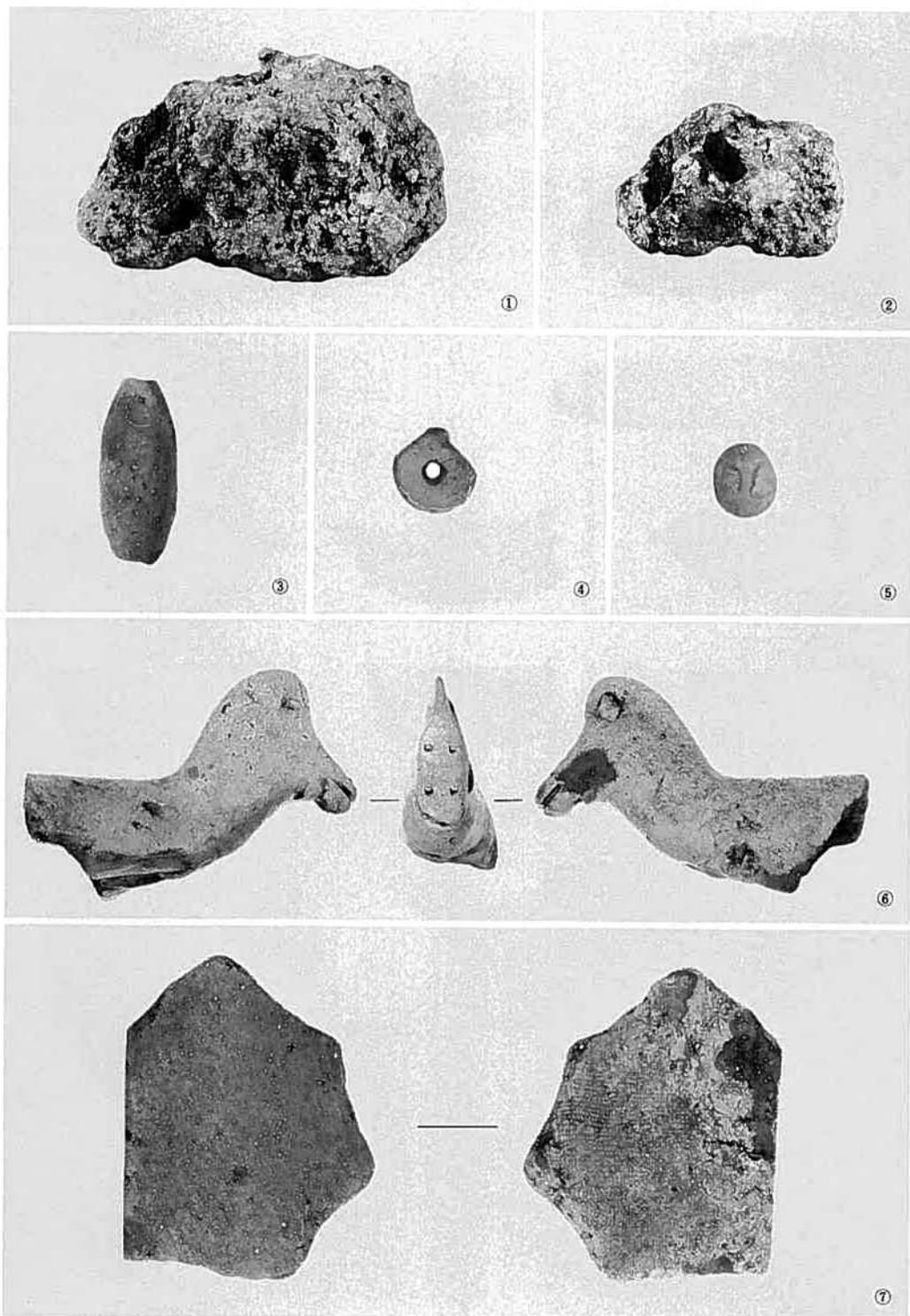


① 土師器(SK-7) ②・③ 土師器(SD-1) ④ 須恵器杯身(I地区柱穴)
 ⑤ 鍋 (SK-7) ⑥ 須恵器杯蓋(SD-2) ⑦~⑪・⑬ 須恵器杯身(SD-2)
 ⑫ 須恵器壺(SD-2) ⑭ 須恵器横瓶(SD-2)



①~④·⑥ 須惠器杯蓋(Ⅲ地区包含層) ⑤·⑦ 須惠器杯蓋(V地区包含層) ⑧~⑬ 須惠器杯身(Ⅲ地区包含層)
 ⑭ 須惠器甕(Ⅲ地区包含層) ⑮ 土師器小甕(Ⅲ地区包含層) ⑯ 須惠器甕(V地区包含層)
 ⑰ 須惠器甕(V地区包含層)

図版第10



① 鉄滓(SD-2) ② 鉄滓(SD-3) ③ 土錘(Ⅲ地区包含層)
 ④ 土製紡錘車(Ⅲ地区包含層) ⑤ 土製模造鏡(Ⅳ地区表採)
 ⑥ 土馬(SD-3) ⑦ 瓦(SD-3)

山口県埋蔵文化財調査報告 第122集

下岡田遺跡

平成元年2月

編集 財団法人 山口県教育財団
山口市大手町2130

山口県教育委員会文化課
山口市滝町1-1

山口県埋蔵文化財センター
山口市春日町3-20

発行 財団法人 山口県教育財団
山口市大手町2130

山口県教育委員会
山口市滝町1-1

印刷 大村印刷株式会社
防府市仁井令1505